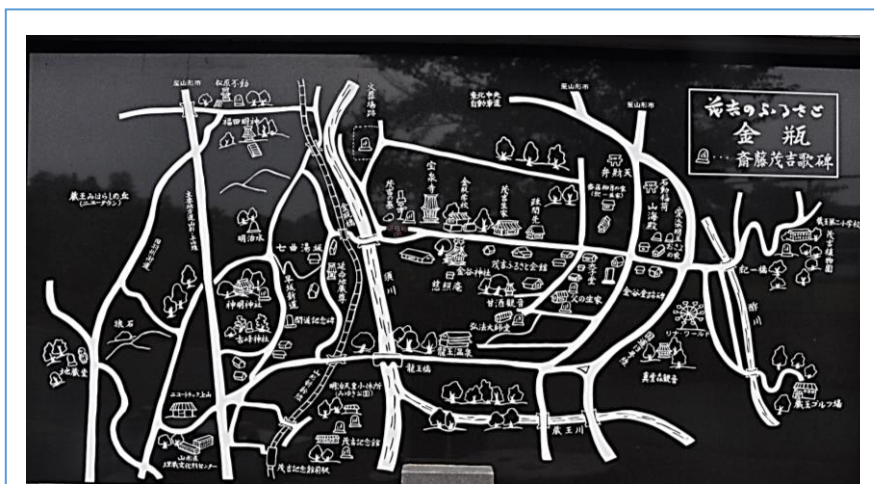


# かみのやま 歴史・文化財さんぽ

第33号（令和2年10月）

ミドリ「今日は、<sup>かなひめ</sup>金瓶ね。」  
ふみお「うん。斎藤茂吉のふるさとだ。」  
あゆむ「学校でよく話を聞くよ。」  
ミドリ「短歌の学習をしているからね。」  
ふみお「でも、短歌づくりはむずかしい！」  
ミドリ「そうね、いい言葉がなかなかみつからないの。」  
あゆむ「かんたんだよ。見た通り、思った通りの言葉をつかえばいいんだよ。」  
ふみお「そうなんだけど、<sup>う</sup>浮かんだ言葉がその時のようすや気持ちをうまく表している感じがしないと悩んでしまう。」  
ミドリ「それに、言葉や歌の響きも気になるわね。」  
文じい「ふむ、そうじゃの。<sup>さき</sup>逆にうまく表せた時はうれしくもなるの。」  
ふみお「最近、<sup>さいきん</sup>茂吉の短歌が大きく<sup>ちからづよ</sup>力強いなど感じるようになった。」  
ミドリ「そうね、そんな茂吉が生まれ<sup>そだ</sup>育った金瓶をよく見てみましょう。」  
あゆむ「さあ、ここだな。おお、<sup>え</sup>絵地図みたいなものが立ててあるぞ。」  
ミドリ「あら、すばらしい絵地図ね！」  
ふみお「ここは、橋の近くだからこの辺かな？  
茂吉の墓<sup>はか</sup>とか、茂吉の生家<sup>せいけ</sup>などがあるね。」  
文じい「今日は、生家じゃ。」



「茂吉のふるさと金瓶」石碑建立委員会

# さいとうもきち 斎藤茂吉

## せいけ の生家

あゆむ「ここだな。すごい門だな。“茂吉の生家”  
という<sup>かんばん</sup>看板がかけてある。」



ミドリ「あれ？ 斎藤茂吉なのに、表札は守谷とな  
っているわね。」  
ふみお「茂吉は、守谷家に生まれ、後に斎藤とい  
う人の<sup>ようし</sup>養子になるんだよね。」

あゆむ「説明板があるよ。」

ミドリ「えーと、明治15年生まれ、  
三男<sup>さんなん</sup>だって。そして、東  
京の病院<sup>びょういん</sup>長の斎藤紀一  
さんのところに行って、  
東大医学部<sup>とうだいいがくぶ</sup>卒業！」

ふみお「その後、紀一さんの次女  
輝子さんと結婚し、青山  
病院長を引き継いだん  
だ。」

ミドリ「そして、生母<sup>せいぼ</sup>いくさんは、  
この家の蔵<sup>くら</sup>座敷<sup>ざしき</sup>で、59  
歳<sup>さい</sup>で亡くなったんだわ。」

ふみお「その悲しみを歌い上げた『死にたまふ母』59首は、日本短歌史上の絶唱と評価されているとある。」

文じい「それらの短歌は『赤光』という歌集におさめられたが、それは高く評価され、多くの人に影響を与えた。」



『生誕100年記念  
「斎藤茂吉展」(上山市)』より転写

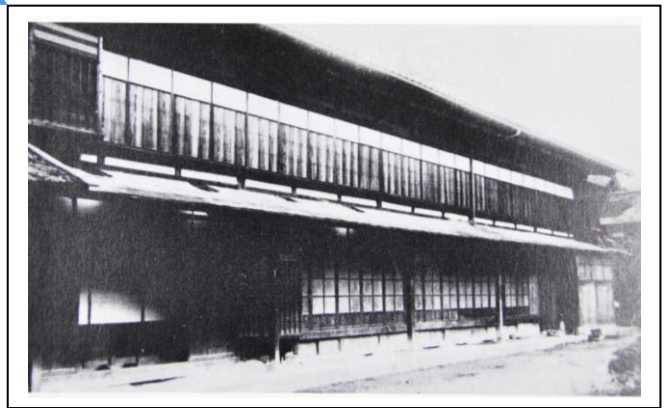
の左に続いている**粉蔵**と合わせて4点が、市の指定文化財になっておる。」

あゆむ「ふうん。もう少し奥を見てみたいな。」

文じい「待ちなさい！ここは現在守谷さんが住んでいらっしゃる。こういうところは、これ以上入ってはいけない。外の方からそっと見るだけにするのがエチケットというものじゃ。」

ミドリ「そうね、いろんな人が訪ねてくるから、守谷さんも迷惑をしているかもね。」

文じい「ふむ。そのかわり、昔のお屋敷の**写真**が載っている本を持ってきた。2階は**蚕室**つまり、**養蚕**の部屋だったようじゃ。」



ミドリ「ここに、歌が書かれているわ。“死に近き母が額を蕪りつつ 涙ながれて居たりけるかな”。」

あゆむ「これは、ぼくでも少しわかる感じがするな。」

ふみお「ところで蔵座敷というのはどこかな？」

あゆむ「右のこの蔵じゃやないの？」

ミドリ「あら、ここにも説明板がある。そして、歌も書いているわ。“金瓶蔵のあるところ” “ふるさとの 蔵の白かべに鳴きそめし 蝉も身に沁む 晩夏のひかり” (あらたま)。」

ふみお「『あらたま』という歌集にあるんだね。蝉がすうーと飛んできて白い壁にとまったかと思うと、すぐ鳴き始める。季節の変わり目りの少しやわらくなった光の中、夏の最後の鳴き声がなんとなくさびしく身に沁み込む。そんな感じがする。」

文じい「ふむ、ところで、この蔵は、**外蔵**じゃろう。蔵座敷は**母屋蔵**のことで母屋につながっているところじゃろうの。」

ミドリ「なるほどね。それにしてもこの門も、大きい**屋敷の門**という**雰囲気**があるわね。」

文じい「この**屋敷門**と、**母屋蔵**、**外蔵**、それに、門

ふみお「死に近き母という歌は、確か他にもあったよね。」

文じい「“死に近き 母に添い寝のしんしんと 遠田のかはず 天に聞こゆる”。」

ミドリ「聞いたことがある。お母さんの額を蕪りつつという歌につながっている場面ね。」

あゆむ「“かはず”といのは？」

ふみお「かわずと読み、蛙のこと。しんしんとふける夜空一面に蛙の鳴き声が響き渡っているんだね。」

文じい「“しんしん”とは、自分の心の中にもというような感じもある。“天に聞こゆる”は、テンという響きとともに**壮大なもの**を感じるの。」

ミドリ「茂吉のこともっと知りたいわ。お墓やお寺、学校もあるわ。また来ましょう！」